

《書評》

奥山正司著『大都市における高齢者の生活』

法政大学出版局 2009年

小坂啓史

本書は長きにわたり、高齢者の生活や高齢者福祉の政策にかかわる実証研究を続けられてこられた著者による、1979年から2008年にかけて（各章に相当する論文初出年による）の研究成果をまとめたものである。構成する各章を貫く目的としては、長寿と「ウェル・ビーイング (well-being)」な社会生活、「サクセスフル・エイジング (successful aging)」を実現することへの人びとの希望を念頭に置きつつ、高齢者福祉の政策実施状況の把握とその向上、さらにはその前提として捉えるべき高齢者の家族・社会生活のあり方を、多角的な視野から立体的に組み立てていくことにあるといえる。

そのような目的の下、著者自身が参加した多くの社会調査の研究結果や、既存のデータ等を用いた分析と考察から、政策のターゲットが何処に所在するものなのかを社会学的に記述し、さらにそのコンテクストに適った対策を手堅く提示していく諸論文を主体とする本書は、以下のような章構成となっている。すなわち、序「社会老年学の研究とその方法」、1章「老夫婦のみの世帯の追跡研究」、2章「大都市転入高齢者の生活と同居子との社会関係—東京都下の場合」、3章「三世代同居家族の比較研究—姑・嫁・孫娘を対象として」、4章「家族の保健福祉的支援機能とその社会的要因—一般高齢者への横断研究と脳血管疾患患者への縦断研究から」、5

奥山正司著『大都市における高齢者の生活』

章「高齢在宅サービス利用者の被災後の生活と課題—大震災における神戸市の追跡調査より」、6章「高齢者の家族・親族からのサポート意識—国際比較研究の意義と課題」、7章「介護負担及び介護規範意識に関する日韓比較研究—東京都とソウル市の比較」、8章「高齢者の子どもとのソーシャルネットワーク—一人暮らし及び夫婦のみ高齢者の追跡研究」、9章「単身高齢者の社会経済的生活と家族の福祉的支援」、10章「都市貧困老人の家族生活史の分析—不安定就業階層の老後問題」、11章「介護保険法案のしくみと法施行後の地域間格差」、12章「介護保険制度下における農村の高齢者介護—東北農村の事例を通して」の各章である。

以上の主題をみると、一見広範な主題の集合という観を呈してはいる。しかし、高齢者の「生」が否定的に包囲される場面については、実際には—U.ベックのいう「リスク社会」としての現代社会において—本書以上の多様性をもって提示することさえ可能だろう。それは天災など自然から降りかかるもののみならず、リスク管理の名の下で作り出されたさまざまな社会装置のしくみそのものが、リスクを増大させたり、リスク要因化したりするということは、既に論を待たないことであるからである。こうした中で、本書が作り上げた見取図（それは「生」の現状としてのものと、それへの応答としてのものの、両面をもつだろう）は、どのようなかたちに成し遂げられたのであろうか。本稿では、その全体像を精密に描写することは、紙幅の都合もあり避けねばならないが、その軸としての各章における視点を述べつつ、全体的な骨格について評者なりに考察していくこととしたい。

まず1章から3章までは、高齢者の家族形態に着目しつつ、世代間関係と移動（転居）による生活への影響といったことを分析したものである。1章では、加齢に関する研究の場合、横断的調査よりも縦断研究、とくに本章で用いる追跡研究に意義があることを確認した上で、高齢者の居住移動、子どもとの居住形態、社会関係の変化について分析がなされている。

2章では子世代との関わりの中での高齢者の移動（転居）とその後の生活について、3章では三世代同居家族を対象とし、その援助関係や家族役割、居住形態の意向等について明らかにされている。

続く4章から7章までは、より広い空間・地域間の「比較」の方法論的視点の要素が、より鮮明に導入される。ここでは、都市に対する農村、そして日本に対しての諸外国といった比較対象であり、日常生活が「身体環境」や「自然環境」から甚大な影響（疾患や災害）をおよぼされた後の状況下での支援のあり方や、家族介護・サポートについての分析を行っている。4章では脳血管疾患が取り上げられ、さらに大都市と農村地域の比較の観点が、5章では阪神・淡路大震災後の生活・介護状況、6章および7章では国際比較分析の方法がとられ、日本の高齢者と高齢者を取り巻くサポート関係の状況が相対化されることで、よりリアルに鮮明に描き出されている。

8章から10章にかけては、高齢者のの子どもとのソーシャルネットワーク、IT技術を用いた家族支援ネットワーク、高齢日雇労働者の家族生活史にみるネットワークの欠如といったことが取り上げられる。ここでは社会階層がひとつのキーワードともなっており、社会経済的背景が、高齢者生活へ及ぼす影響の強さを浮き彫りにしている。

11章と12章では、前述のような状況に対する社会的方策としての介護保険制度について、保険料やサービスの地域間格差状況、農村部へ導入した場合の課題といった点を別出、対処の方法についての考察を行っている。

以上、本書では既述したとおり多様な視点から実証研究がなされていることが分かるが、通底する問題関心としては、やはり「高齢者にとっての家族生活に対するサポート」という点に絞られるであろう。家族生活を脅かす内的要因として、家族形態や関係そのものから生じるもの（例えば子世代との同別居、扶養・介護のあり方や意識の高低等）、そして外的要因としての自然災害や疾患、社会経済的背景の影響、といったものを取り上

げ、その状況の分析と対処方法の考察を行うこと、さらには高齢者の家族関係をサポートするものとしてのネットワークや、制度のあり方を吟味していくこと。こうした立ち位置から俯瞰しうる地平（現代社会）には、ネガティブ・ポジティブ両面の要素が絡み合うさまざまな高齢者の生活「状況」があり、さらにその先には、個人的あるいは主観的に、そして社会的あるいは客観的にも、肯定的に描いていけるのではないかという生活「追求」が位置する。既に現実化している「高齢社会」日本において、人口の側面だけでなく、文化的側面においても恐らくマジョリティとなっていくであろう「、」高齢者世代の社会的位置のより鮮明な可視化、そして高齢者自身によるライフコースのより納得のいく構築のためには、従来から社会政策の対象として重視され、また個人化していく社会における新たな「連帯」の基盤としても、家族生活の占める役割が現実的に大きなものとなっていく、ということが読み取れる。本書の各主題内における経験的一般化が、今後期待される系統的な整理を経て、上述の目的は理論的にも遂行されることとなるだろう。

最後に、評者の私的な経験も若干含むが、著者の実証研究への取り組みそのものについて述べさせていただきたい。評者がまだ社会調査の実際に関して右も左もわからない頃、評者は著者が中心となった調査チームに何度か参加させていただくことができ、調査の「現場」について広く深く学ぶことのできる機会があった。そこでは、調査遂行のノウハウのみならず、驚くべきフットワークの軽さによって、正確なデータの取得を積極的に進めていく著者の非常に真摯な態度も目の当たりにしてきた。当時、評者は調査者としての情熱と姿勢、決断力と行動力の大切さを、著者によって心に刻みつけられたといっても過言ではない。読了後、本書はそうした著者自身の、研究者としてのエートスの実体化でもあるのだ、といった印象をも強く抱いた。